

2014年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 配付されたもの以外の下じき・用紙は使わないこと。
5. 用紙を立てて見ないこと。
6. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、  
トイレに行きたくなった場合、気持ちのわるくなった場合は、だまっ  
て手をあげること。

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

みなさんは「自給」という言葉を聞いたことがありますか。最近「日本の食料自給率が四〇%しかない」などとよく言われていますが、そこで「自給」を聞いたりしますが、ほかには使われているのを知らないでしょう。

百姓にとつても、「自給」はあまり使う言葉ではありませんでした。綿を栽培し、収穫し、紡いで糸にして、村の中の染め物屋に染めてもらつて、それを冬の農閑期に織つて、その生地で家族の服を縫う、というのはあたりまえにおこなわれていたことで、それをことさらに「着物を自給している」と言うことはなかったでしょう。米だつて、野菜だつて、薪だつて、山菜だつて、自給しているというのではなく、一昔前までは、そういう暮らしがとうぜんでした。なぜなら、そうしないと村では暮らしていけなかったからです。そういう暮らしが暮らしやすかつたからです。それほど、田畑も含めて自然との関係が、昔の日本人は深かつたのです。自然のふところに抱かれて暮らしていれば、自給などはあたりまえでした。

むしろ自給を意識するのは、よそから購入するときでした。竹のない村に竹籠を売りに来る人たちがいました。村人は感心して、その竹細工の籠や箆を買ひ求め、大切に使いました。「こういう箆になる竹というものはどういうふうに生えているのだろう」とうらやましがったのです。近くの村の一〇〇歳になるじいちゃんから聞いた話ですが、青年のころ、遠い地方から来た竹細工の上手な人に、青年たちは竹籠づくりを習つたのだそうです。一〇日ほどその人には村に泊まつてもらつて、毎日公民館で真剣に竹の切り方から、割り方、削り方、編み方まで、教えてもらったのだそうです。それから、竹籠や竹の道具を村の人たちは自給できるようになったと聞きました。この場合の自給は、竹を加工する技(仕事)の自給と切り離せません。

①その竹籠づくりの技も、今ではほとんど無用のものになつてしまい、竹藪ばかりが目立ちます。輸入された竹籠や箆が驚くぐらい安い価格で売られているので、今さら竹細工でもあるまいとみんなが思っています。しかし、ときどき私は思うのです。竹の用具を自給していたころには、こんな竹藪は出現しなかつただろうし、竹林の風景はいとおしく見えていただろうと。

よくわからないことがあります。自給はあたりまえすぎるものであつたために、ことさらにそれを守ろうとする気持ちもありませんでした。しかし、それが壊れていくことに抵抗が少なかつたのはどうしてだろうか、と疑問に思うのです。竹製品にかわるプラスチック製品が入つてきても、当初はそんなものを買わなくても、従来のものでまにあつていたでしょう。しかしそれがいたんで、新しい竹の籠や箆が必

要になつても、もう「買ったほうが安い」と思うようになっていったのだと思います。

自給を壊したのは「買ったほうが安い」という経済システムで、それは分業からはじまり、やがて農業が農業の内部の仕事を、ほかの産業へ外注するシステムへと拡大していきました。鋤で耕していたころは、鋤は村の中の鍛冶屋で自給できていました。それが牛や馬で耕すことになる、犁は村では自給できず、遠くの犁の製造所から買うようになりまし。それでも牛や馬は家で育てていたのです。それが耕耘機やトラクターになると、もう自給できるものではありません。

私も「米は自給しています」と平気で言いますが、耕耘機とその燃料の軽油は購入し、肥料は養鶏農家の友人から鶏糞を分けてもらつています。一〇〇%自給しているわけではないのです。私たち百姓は近代化に応じるために、まず手段(農機具)や資材の自給を捨て、せめて仕事と食べもの(農産物)の自給だけは守つたのです。ところが、さらに近代化が進むと、その仕事と食べものの自給もしだいに捨てざるをえなくなつていきました。

こう考えてくると、私たちが現在使用している「自給」とは、けつして②「自給自足」のことではありません。手段や資材は自給しなくても、結果として生産される食べものだけを自給していると表現しているのです。その典型が「食料自給率」なのです。しかし、そういう手段や資材の自給を捨てないと、農業は近代化できずに「進歩・発展」もできなかったのです。

食べものの自給すら「遅れた暮らし」だという思想が村に入りこんできたのが、一九七〇年代だつたと思います。農業の近代化は、生産技術からはじまり、とうとう暮らしにまでおよぶようになったのです。これとほぼ同時に、町村の小さな青果市場が、都市の大きな市場に合併されていきました。自給野菜の余つたものを出荷することは不可能になりました。こうして農家の仕事の自給は壊れはじめ、食べものの自給も衰退してきました。

とくに家族みんなで農業をしていた一九六〇年代までは、自給していた野菜も、家族が働きに出だすと、「買ったほうが安い」状態になりました。野菜のタネをまいて育てて、収穫する時間があれば、働きに出たほうが収入が高くなつたからです。またそういう時間をほかの作物の栽培に振り向けるほうが、もうかるようになったからです。これに危機感を抱いた百姓たちは、野菜の自給運動を起しましたが、その根柢は「買ったほうが安いかもしれないが、買うにはお力ネがいる。自給するとお力ネが節約できる」というものでした。これでは、お力ネ(収入)が増えれば自給は不要になるのは目に見えています。一方、自給を軽視する人たちからは、「農家が自給するから、野菜が売れなくて、専業の野菜農家の発展を妨げる」という主張が真顔でなされていました。

③現代でも同じようなことがつづいていきます。北海道の百姓の友人から聞いた話ですが、昼食時間になると、村のコンビニの弁当売り場

に行列ができるのだそうです。弁当をつくる時間よりも、畑で生産する時間のほうがおカネになるからでしょう。畑で働いて国内農産物の生産高を上げるほうが「自給率」には貢献するでしょうが、何かが壊れてしまっています。

私たち百姓は、自分が食べているもののうち、わが家の田畑でとれたものはわかっていきます。私は米や野菜を買うことはほとんどありません。牛乳や肉や魚やビールは買います。どれくらい自給しているかはわかっていきます。しかし、これを数字であらわすとすると、かんたんではありません。自給しているものを仮に買ったとしたらいくらになるか、それに対して購入した食料品の金額はどれくらいになるか、を計算すれば、自給しているものの金額の割合が出るでしょう。わが家では約五〇%でしょうか。

しかし、自給をおカネに換算する習慣はそれまでありませんでした。なぜなら、おカネになる世界とは別の世界で自給されていたからです。その自給までもおカネに換算するようになったのは、⑤6章で説明しますが、④農家の自給を捨てさせたかった日本の農業政策の影響です。

こうして百姓の暮らしの自給率はどんどん低くなってきました。昭和三〇年ごろの調査では、多くの百姓が金額では七〇%ほどの食料を自給していました。現在では一〇〇%ぐらいの百姓が多いと言われています。もともと一〇〇%自給するのは不可能ですが、どうしても低くなってしまったのでしょうか。

仕事の「分業」が進んだからです。それは日本の国をあげての政策でもありました。分業する目的は安く生産するためです。田んぼで稲と麦を作付けし、畑ではいろいろな野菜を栽培し、牛や鶏を飼い、山では薪をとり、綿を栽培して糸を紡いで染めて織って着るよりも、田んぼだけで稲と麦だけを栽培するほうが、田んぼの面積を広げられるなら、稲麦だけの機械ですむし、仕事もそのことだけに専念できて、生産性が高まるのです。野菜や肉や卵や服は、買ったほうが安くなるし、薪を採りに山に行くよりは、ガスや石油や電力のほうが手間が省けるのです。

つまり、自給するよりも「買ったほうが安い」という状況こそが、進歩・発展した近代化された社会の姿だったのです。百姓も含めて、国民全体が「経済成長」という夢に人生をかけた時代が、一九六〇年代から七〇年代にかけてあったために、自給は衰えたのです。そうしたほうが社会全体としても、おカネがまわり、経済が大きくなり、成長できるのですから、否定する必要は何もないように思えました。現実には農林水産省は一貫して、農業はもつと規模拡大してください、と分業化(専門化)をすすめてきました。農家の食料自給は、別に低くなくてもかまわないと言いつづけてきたのです。

これは、多かった百姓を減らして、農業以外の産業に労働力を「供給」するための日本政府の政策だったのです。⑤これが国内だけの奨励

であれば、百姓の暮らしは壊れても、「日本農業」の国民への食料供給率(つまり日本の食料自給率)は下がるはずはなかったでしょう。ところが、分業は国内にとどまらず、外国にもおよんでいったのです。わかりやすく言えば、外国から安く豊富に輸入できる農産物は、外国から輸入すればいいという考え方が広まっていったのです。農家の食料自給率衰退と国家の食料自給率衰退は、土台において⑥共通の思想にもとづいているのです。

(宇根豊『農は過去と未来をつなぐ―田んぼから考えたこと―』)

(注)「6章で説明します」とありますが、問四については、本文中に書かれていることのみによって解答してください。

問一 傍線部①「その竹籠づくりの技も、今ではほとんど無用のものになってしまい」とありますが、どうして「無用のもの」になったのですか。

問二 傍線部②「『自給自足』」とありますが、ここでの自給自足とは、どのようにすることですか。「自給」という言葉を使わずに答えなさい。

問三 傍線部③「現代でも同じようなことがつづいています。」とありますが、「同じようなこと」の表す内容を、傍線部③の直前の段落中の表現を使って答えなさい。

問四 傍線部④「農家の自給を捨てさせたかった日本の農業政策の影響です。」とありますが、そのような日本の農業政策の目的は何だと筆者は考えていますか。「〜という目的。」に続くように、本文中から十五字以上、二十字以内で抜き出しなさい。(字数には句読点等もふくみます。)

問五 傍線部⑤「これ」とありますが、「これ」の指している内容を、本文中から五字以上、十字以内で抜き出しなさい。(字数には句読点等もふくみます。)

問六 傍線部⑥「共通の思想」とありますが、それはどのような考えですか。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

少年オリヴィエは、第一次世界大戦後のパリで父そして母を亡くし、父方の伯母（ヴィクトリア）の一家に引き取られる。その年の夏休み、一人で、初めて父母の故郷の村ソググに行き、父方の祖父母と叔父ヴィクトールの住む家で過ごす。祖父は半年前から脚に痛みを覚えて鍛冶屋の仕事を手を休んでおり、跡継ぎのヴィクトールが仕事を続けている。祖母はいまも元気で、毎日のように野山を歩きまわり、魚やキノコなどを採っては、オリヴィエたちにごちそうしている。オリヴィエは、異国のような村で、豊かな大地に触れ、温かな人々の懐に飛び込んでいった。そして、そんな夏休みも終わりを告げようとしていた。

「みんなにさよならを言ったかい？」オリヴィエがもどると、祖父が言った。「坂下のいとこたち、役場の人たち、それに……」

「みんなに言ったよ、おじいちゃん」

「よろしい。失礼があつてはいかんからな」

夕方、オリヴィエは窓辺の祖父の隣に腰かけた。ヴィクトールがその日最後のハンマーをふるい、祖母が夕食の準備をしているあいだ、ふたりは太陽がしずんでいくのを見つめた。

そこには、忘れられない風景が広がっていた。何ひとつ動かない静かな世界だ。季節だけが色あいを変えていく。サンシエリィダプシエ行きのバスが下っていくル・ピュイ街道、小さな洗濯小屋、カエルのいる灌漑水路のほとり、けわしい坂道、ムスロン茸が生えている野原。ふたりは何も話さなかったが、いろいろな思いがあふれかえりそうな沈黙の中で、老人と少年は、いく千もの言葉をかわしていた。

ふたりは、祖父がたどたどしい手つきで初めて文字を書いたテーブルや、四人の子どもたちが生まれたベッド、自慢の食器棚、それから、夏にとり残されてふらふらと飛んでいる一匹のハエを見つめた。祖父が口を開いた。

「子ども時代にあるんだ……」

「何が？」

「人生でいちばんいい日々だよ」

夕食は、レンズ豆のスープと「マヌー」だった。羊の足と米を煮込んだ郷土料理だ。でも、みんな、少ししか食べなかった。ヴィクトールは、オリヴィエのあごを、どこか照れくさそうに持ち上げた。

「①やれやれ、まったく大変だったよ！　ようやく自転車のサドルをもとにもどせるぞ！　おれがあれに乗ると、まるでカエルがマッチ箱にまたがってるみたいだったからな！」

それから、早口でつけ加えた。

「残ってくればいいと思ってたんだ。自転車だつてどこかで見つけてやつたさ。ここは気に入ったろう？」

「うん、すごく、すごく！」

「おまえほどあちこち、山ん中を歩きまわったもんはおらんよ。ひとりをのぞいてはな」祖父が妻を見やりながら言った。

それ以外、三人は旅立ちのことにふれなかった。②何でもない、ふだんと同じ晩のようにふるまった。祖母は③夜なべ仕事を持って出かけていき、三人の男たちは床についた。オリヴィエはなかなか寝つけず、暗闇の中で長いこと目を開けていた。

④ニッカーボッカーと対の上着、きれいにアイロンをかけられた半袖シャツ、ぴかぴかのサンダル、紺のベレー帽、出発を待つばかりに用意されたトランク。不器用にひもを掛けた、ヴィクトリア伯母のためのソーセージとチーズをつめこんだ段ボール箱。いい天気の日を約束する朝もや。牛たちが飼葉桶の干し草を引っぱり出す音、鎖が木をこする音、首から下げた鈴の音、溝に糞が落ちる音。いつもよりゆつくりとした朝ごはん。ひっきりなしに四人のうちのだれかが、時計の文字盤に目をやった。

祖父は、食器棚の前で木靴の先を見つめながら、ゆつくりとももへ上がつてくる痛みを耳をすましていた。ヴィクトールは洗面台に向かい、すみっこをぬらしたタオルで猫みたいに身づくろいをした。オリヴィエは、塩気のきいたバターを塗ったパン切れについた自分の歯形を見ていた。

祖母は、まだ⑤かぶりものを着けていなかった。オリヴィエは、腰まで波打つ、驚くほど豊かな灰色の髪を初めて目にした。祖母はどこかうわのそらで、いつになくせわしげに貯蔵室と部屋を行ったり来たりしていた。ひとつひとつの動作がやけにぎこちなくて、心ここにあらずというふうだった。

「おれもバスでランジャックまで下るよ」ヴィクトールが言った。「鉄の支払いをひとつずつすませて、自転車でもどつてくる」

話好きな祖父がだまりこくつていた。心の中で何をつぶやいているのだろうか？……さよなら？　そう、さよならかもしれない。さよなら、高い山々とけわしい峡谷よ、さよなら、岩だらけの高原よ、さよなら、森の草花と小川のせせらぎよ、石づくりの村よ、草原よ、小径よ、木々よ。……オリヴィエの祖父もこんなふうな、別れを告げているのかも知れなかった。オリヴィエよりもっと長い旅に出るために、「またね」ではなく「さよなら」と。さよなら、(注4)前世紀の貧しい少女マリーよ、さよなら、(注5)ブルー、さよなら、若き日々よ、さよなら、かわいい孫よ、さよなら。

「もう行く時間だ」ヴィクトールがトランクを持ち上げて言った。「さあ、おじいちゃんにお別れをして……」

「オリヴィエ……」

老人は立ち上がり、オリヴィエをぎゅっと抱きしめた——長いこと、何も言わないままで。それから、体を傾けて、孫の耳元にささやいた。

「これつきり会えなくなっても、おじいちゃんのことを忘れないでくれ」

(注6) 祖母は暖炉のそばに突っ立っていた。しゃんと背を伸ばし、みんなからは離れて、まるで(注7)下働きの女が自分には関係のない光景をながめているみたいだった。祖父が、オリヴィエを妻のほうへ押しやった。

「さあ、おばあちゃんにもさよならをお言い」

初めて、祖母が自分からオリヴィエのほうへ歩み寄った。急なことにどぎまぎしているオリヴィエの肩に両手を触れ、体をかがめて、不器用なキスの音を二回、オリヴィエの頬のわきで鳴らした。そうして頭を上げたとき、いつもはあんなに硬く光っているきれいな青い瞳から、長いことまづげに引きとめられていた涙が、ふた筋流れ落ちた。

「急いで行こう、オリヴィエ、時間だ！」

③オリヴィエは笑顔をつくりながら、土地言葉で「またね！」と言った。そしてヴィクトールのあとを追ひ、牛小屋で三頭の牛たちと小さな(注8)マルカドゥーヌにさよならを言い、(注9)シロアシの頭にキスをした。ヴィクトールが言った。

「おばあちゃんが、珍しくちよびつとだけ泣いて見せたね」

④あのおばあちゃんが……。中庭のはしまで来て、オリヴィエはふりかえり、窓を見上げた。ばやけた景色の中にふたりの姿があった。いつもの丸い帽子をかぶり、首にスカーフを巻いてチョッキを着こんだおじいちゃん。おばあちゃんはすっかりかばそく見える。ふたりは、まるで黄ばんでしまった昔の写真のようにそこにいた。すっかり古び、色あせ、ひからびて、時とともにではなく消えてしまう写真……。

オリヴィエはうつむき、きゃしゃな肩をすばめて自転車を押しながら、トゥールヌーヴ通りを歩きだした。ポケットはハシバミの実でふくらんでいた。額や鼻のまわりには、太陽がそばかすを残していた。手足や胸には筋肉がつき、心にも新しい力をもらった。それなのに、悲しみや辛さが波のように打ち寄せては体を通り抜け、心の中で何かが震えている。

「さよなら、オリヴィエ……」そっとささやいたのは、だれだろう？　木々の葉ずれか、友人たちか、ソーグの村か、それとも「時」か——。でもその声は、オリヴィエには届かなかった。

通りのはしまで行くと、オリヴィエはあごを上げた。小さな風が、ぬれた頬を冷やして吹き過ぎていった。

(ロベール・サバティエ作　堀内紅子訳『ソーグのひと夏』)

(注1) 夜なべ仕事 Ⅱ ここでは、女性たちが毎晩仲間と話しながら編み物をする集まりのこと。

(注2) ニツカーポツカー Ⅱ ひざ下ですそ口をしぼった、ゆつたりとしたズボン。

(注3) かぶりもの Ⅱ 頭にかぶるもので、帽子や頭巾、手ぬぐいなどの類。

(注4) 前世紀の貧しい少女マリー Ⅱ 若いころの祖母のこと。

(注5) ブルー Ⅱ フランスの古い舞曲、または踊り。

(注6) 祖母は暖炉のそばに突っ立っていた。 Ⅱ 食事のとき、調理ストープから離れずに、立ったまま食べるのが田舎の女性の習慣だった。

(注7) 下働き Ⅱ 家の雑用などを仕事とする使用人。

(注8) マルカドゥーヌ Ⅱ オリヴィエがいちばん好きな牛マルカードの子どもの名前。お産のとき、オリヴィエが取り上げた。

(注9) シロアシ Ⅱ 犬の名前。足だけが白い。

問一 傍線部①「やれやれ、まったく大変だったよ！　ようやく自転車のサドルをもとにもどせるぞ！」とありますが、このときのヴィクトールの気持ちを説明しなさい。

問二 傍線部②「何でもない、ふだんと同じ晩のようにふるまった。」とありますが、それはなぜですか。

問三 傍線部③「オリヴィエは笑顔をづくりながら、土地言葉で『またね！』<sup>アラビエ</sup>と言った。」とありますが、このときのオリヴィエの気持ちを説明しなさい。

問四 傍線部④「あのおばあちゃんが……。」とありますが、「あのか」とは、「祖母」のどのような様子を指していますか。「く様子。」に続くように、二十字以内で答えなさい。（字数には句読点等もふくみます。）

【三】 次のカタカナの部分を漢字に直しなさい。

- |    |                 |    |                |    |                              |
|----|-----------------|----|----------------|----|------------------------------|
| 1  | 先生からペンをハイシヤクする。 | 2  | 雨で運動会をジュンエンする。 | 3  | エンゲキを鑑賞 <sup>かんしょう</sup> する。 |
| 4  | 努力する人をソンケイする。   | 5  | 王にチュウセイをちかう。   | 6  | サイゲンのない要求をする。                |
| 7  | 会社にシュウシヨクする。    | 8  | タンジュンな仕組み。     | 9  | セイミツな機械。                     |
| 10 | 新商品をセンデンする。     | 11 | ゴムのクダがつまる。     | 12 | 身ぶりをマジえて話す。                  |
| 13 | 机にキズがつく。        | 14 | 支配者にサカらう。      | 15 | 体操で上半身をソらす。                  |

受験番号

氏名

評点

【一】

問一

問二

問三

問四

問五

問六

【二】

問一

問二

問三

問四

【三】

|    |    |   |
|----|----|---|
| 11 | 6  | 1 |
| 12 | 7  | 2 |
| えて |    |   |
| 13 | 8  | 3 |
| 14 | 9  | 4 |
| らう |    |   |
| 15 | 10 | 5 |
| らす |    |   |

様子。

という目的。